

[優秀賞]

「未来のために」

鹿部町立鹿部中学校

3年 高本 弥生

「いったい何ができるんだろう。」

北方領土の元島民の桜井和子さんが故郷への思いを語って下さったのを聞いてそう思いました。日本は、歴史の事実に基づいて正当な主張をしているのに、なぜ、北方領土問題は、なかなか進展しないのだろうかとも思いました。

インターネットで更にさまざまな情報を集めていく中で、択捉島出身の鈴木咲子さんの言葉が目にとまりました。

「自分たちも歩み寄るといふか、そういう気持ちでなければ、この問題は解決しない。それが領土問題交渉の後押しになる一番大事なことかな。」

その言葉は、鈴木さん自身がビザなしでの墓参を積み重ねてきた経験から生まれた重い言葉だと感じました。40年以上ぶりに故郷の択捉島で見たものは人里離れた場所に打ち捨てられたばらばらの墓石でした。二年後のビザなし交流で、その話に熱心に耳を傾けたロシア人が「大変恥ずかしいことをしたと思います。」と涙を流していたそうです。その後、親交を深めてきたロシア人の中には、元島民の墓を守る人も出ているそうです。それは、鈴木さんたちの熱い思いがロシア人に伝わっていることの現れだと思います。怒りや憎しみの感情を乗り越え、交流を深め友好関係を築くことはとても大切なことだと実感しました。

私の父はホタテ養殖を営む漁師です。北海道のホタテ漁はエコラベル「MSC認証」を取得しています。その認証は、イギリスのロンドンにある国際的な団体であり、世界中の海から乱獲をなくし、すべての漁業が持続可能になっていくための活動をしている非営利団体が出しています。何十年もの試行錯誤の末にホタテ養殖の技術を確立したことが認められたのです。

このような技術は北方領土の漁業者にとっても魅力的なのではないかと思います。乱獲を防ぐことにもつながり、海の財産を有効に使うことにもなるでしょう。

さらに天候に合わせて行う浮き球の調整などは、父たち熟練漁師でも難しい作業だそうです。北方領土共同経済活動として養殖技術を提供するならば、時間をかけて一緒に作業しながら技術を伝達する必要があります。そのような時間は、お互いの交流を深め、双方の歩み寄りを促す結果につながるのではないのでしょうか。

鈴木さんは家を奪われ、追い出されたにも関わらず「同じ思いはさせたくない。対話を増やしていくことでお互いの気持ちが柔らかくなっていくことを期待したい。」とも語っています。過去にとらわれず、お互いのためにとってより良い未来を思い描いて行動していくこと。それが私たちにできることだと思います。

北方領土で何かできるのか。どうすればロシアの人たちの心に歩み寄れるのか、これからも自分自身のテーマとして考えていきたいと思っています。奪い合うためではなく与え合う関係を目指すことこそがこれからの未来を築くことになるのだと信じて・・・。